
蝉の声

優耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蝉の声

【Nコード】

N8339E

【作者名】

優耶

【あらすじ】

余命半年を宣言された少年。その時、少年はなにを思っのか？これは夏に訪れた命少ない蝉の物語

生まれた蝉

余命半年・・・。

そういわれた

悲しくなんかなかった。

悔しくもなかった。

ただ、ただ少し、寂しかった。

別に思い残すことなんかなかった、でも・・・

生きていたら、生きていたらいいことがあるかもって思ってた。
った。

母さんは相変わらず泣いてた。

父さんは仕事をやすんで病院まできてくれた。

半年しかない命。

原因はわからず、今の医学では助からないらしい。

病院のベッドの上から窓の外を見る。

蝉の声が聞こえた・・・。

一週間の命を精一杯表現している。

その時、俺は思った。

この半年の命で何ができるのか？

昔から家の中にいるのが好きだったから旅行とかには無縁だ。

けど今はココロの底からどこかに行きたいっておもった。

命尽きるならこんな排気ガスだらけの街はいやだ。

どこか静かな場所。

自分の最後にふさわしい場所。

家に帰って母も父も寝静まった頃。

俺はこっそり、自分のベッドから抜け出す。

家族には内緒で家を出ようと思う。

心配はかけてしまうけど手紙も書いた、きっと分かってくれるだろう。

もう少しで玄関というところ・・・

「おい、どこに行く気だ？」

とつさに振り返る、父がおきていた。

「今日はもう遅いから早く寝ろ」

父は厳しい人だった、今まで何回も恨んだこともあった。

「ごめん父さん、でも俺は、後悔しないように生きたいんだ。」

俺は静かに、力を込めて言った。

「ふん、余命半年でいたい何ができるんだ？言ってみろ！」

父は怒っていた、でもこれだけは譲れない。

「俺は俺の好きなように生きる！父さんは黙っててくれ！」

生まれて初めて俺は父に反抗した。

しばらくの間お互い睨みあった、やがて父が。

「少し待っている。」

父は寝室にもどったかと思うと、手に大きな封筒を持ってきてそれを俺に渡した。

「なにこれ？」

俺は封筒を開けてみた、中にはたくさんのお金がはいっていた。

「でていけ、もうお前は俺の子供じゃない。父親に反抗する息子などいらん。」

俺はカッとなって乱暴に玄関を出た、そして息が切れるまで走り続けた。

やがて俺は立ち止まり、もう一度封筒をみた。

さっきは暗くて見えなかったがよくみたら封筒にポツポツと何かの跡があった。

~~~~~

「行っちゃったの？」

「・・・起きたのか。」

「あれだけ大きな声出されちゃ起きちゃうわよ。」

「そうか・・・すまん。」

「別にいいわよ、それよりあの子も大人になったわね。あなたに反抗するなんて・・・」

「あいつが大人なものか、いつまでも馬鹿で夢みがちな子供だ。いつまでも馬鹿で、いつまでも、俺の息子だ。。。」

「・・・そうね。」

~~~~~


飛び立った蝉

しばらく公園のベンチで休んだあと、俺は再び歩きだした。

目的地は駅、そこからは適当に行くところを考えて見る。

歩いていると俺はあることに気がついた。

この街の夜がこんなに綺麗だったなんてしらなかった。

なにより真夜中だから人も車もない。

まるでこの世界で今生きているのが自分だけという錯覚まで覚えてしまいそうになる。

しかし、そんな筈はない。

朝になればまたこの街は活気を取り戻し、あるものは学校にいき、またあるものは会社に向かう、家で家族の帰りを待つ者もいるかもしれない。

そんな繰り返しのような日々が続いていく中であるものは静かに朽ちてゆく……。

そんなことを考えているうちに俺は駅のホームにたどり着いた。

そして駅のベンチに腰をおろした。

まだ電車はきていない、当たり前だ、こんな真夜中に電車など来る

はずがない。

自分の携帯で時刻を確認する、時間がたつたびに俺は自分の命の事を考える。

普通の学校に通い、普通の友達、楽しいこともあった。

でも楽しくないことの方が多かった。

そんな退屈な日々の中、異変はおきた。

咳が少しでるので風邪薬をもらいに病院にいったら突然めまいがして、診察室前で倒れた。

そこから先は覚えていない、どうやら大変だったそうだ。

いつその症状がくるかわからないから医者からは絶対安静といわれていたが……。

家に帰らせてくれたのは医者からの良心だったのかもしれない。

そろそろ電車がくる。

駅のホームにも人が集まりだした。

俺は駅のベンチから腰を上げて適当に切符をかって電車に乗り込んだ。

そろそろ人が入ってくる中、俺は隅の座席で眠りについた。

あれからどれくらい時間がたっただろうか？

辺りはまだあかるいが電車に乗っているのは俺と何人かの年寄りぐらいだった。

電車のドアが開いた、俺は行くあてもないのでとりあえずそこで降りることにした。

辺りは山や河、畑などがたくさんあった。

俺は胸いっぱいに空気を吸い込んだ。

・・・気持ちがいい。

都会とはまったく違う、空気に味はないが、これを空気がおいしいというのだろう。

俺はとりあえずホームから出ることにした。

ホームからでて辺りを見渡すとビルなどは一本もなく、まさに俺は大自然の中にいた。

俺は近くにあった麦畑に仰向けになって倒れこんだ。

風が思ったより気持ちよく、うとうとしていた時。

「じらー！」

耳元で大きな声がしたと思ったら自分より少し年上の女性が俺の顔

の前で怒鳴っていた。

俺は飛び起きてその女性の前にたった。

背は向こうが少し大きい。

やがて向こうから話かけてきた。

「なに人の畑で気持ちよさそうにねてんのよ？こっちは汗だらだらだっというのに・・・。」

「すみません。。。」

俺はとりあえず謝った。

「あ！そーだあんた暇だったらちよつと手伝いなさいよ。」

断ろうとしたが無理やり手を引っ張られつれていかれた。

辺りはまだ昼ほどで蝉の声が夏の音楽を奏でていた。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8339e/>

蝉の声

2011年10月5日05時59分発行